

18 世紀英米リバイバル——ホイットフィールドとカルヴァン派メソジスト

藤本 満

序

「evangelicalism」の訳は、その「ism」が広がった時代によって異なってくるであろうが、拙論は 18 世紀英語圏の evangelicalism を「信仰復興運動」「リバイバリズム」と訳すことをご理解いただきたい。

この信仰復興運動を、デイビット・ベビントン（英）やノル(米)らの専門家は 1730 年代の中頃に設定している。無論、ヨーロッパの敬虔主義の勢いを無視して、福音主義の形成を語ることはできない。近年、英国初期メソジストの歴史研究を引っ張ってきたレジナルド・ワードは、18 世紀英国リバイバルに特徴的な野外説教、クラスミーティング、霊想書やパンフレットの頒布、キャンプミーティングなどは、すでに 17 世紀後半から 18 世紀初頭においてフランスのユグノー派、ドイツのモラビア派が用いてきた霊性運動の手法であったと報告している¹。よってワードは福音主義の原点を 1675 年のシュペーナーによる『敬虔なる願望』（*Pia desideria*）としている。

しかし、ピューリタンも敬虔主義も 18 世紀英国の信仰復興運動（リバイバリズム）を生み出した源流にあることを確認しつつも、これら二つの流れと信仰復興運動の間には、断絶があることにも言及しなければならない。

¹ W. Reginald Ward, *The Protestant Evangelical Awakening* (Cambridge: Cambridge University Press, 1992).

たとえば、ピューリタニズムの神学や靈性を積極的に取り入れていたオックスフォード・メソジストは、しばらくするとそれに行き詰まる。彼らは英国国教会の高教会主義に傾注するが、やはりそれにも行き詰まる。その壁を突き抜ける助けを、ウェスレー兄弟はモラビア派から得る。だがモラビア派が英国にリバイバリズムをもたらしたわけではなかった。つまり、ピューリタニズムや敬虔主義の流れが、18世紀英国の信仰復興運動に多大な影響を与えたことは否定できないが、その二つが合流して信仰復興運動が興ったとは言い難い。むしろ、二つの流れとの断絶をも意識するところに、信仰復興運動の「独自性」が見えてくることになる。

18世紀英語圏における Evangelicalism の専門家は、そのはじまりを1730年代に置く²。人物としては、エドワーズ、ホイットフィールド、またウェスレー兄弟が深く関わることになる³。拙論の目指すところは、1735-1740年の大西洋を挟んだリバイバリズムの胎動を、ホイットフィールドに注目しながら確認し、後に展開されるリバイバリズムの特色や傾向性をホイットフィールドの働きに着目しながら概観することにある。

I. 大西洋を挟んで⁴

1734年、アメリカ・マサチューセッツのノーザンプトンの牧師になって5年目を迎えたジョナサン・エドワーズの周辺で信仰に目覚める人々が起こされてくる。11月、エドワーズは信仰義認をテーマに二つの説教をした。冬になると、信仰の覚醒は町全体を包んだ。

「町のすべての人々が永遠の救いについての深い関心に捕らわれるようになった。誰が集まっても話はそのことばかり。どんな機会にも宗教に関することが

² David W. Bebbington, *Evangelicalism in Modern Britain: A History from the 1730s to the 1980s* (London: Unwin Hyman, 1989)

³ Mark A. Noll, *The Rise of Evangelicalism: The Age of Edwards, Whitefield and the Wesleys* (Leicester: IVP, 2004)

⁴ 以下の歴史的情報は、Mark A. Noll, *The Rise of Evangelicalism*, pp.76-99 に詳しい。

語られ、他の話題は消え去った」⁵。3月にはコネチカット川に沿った他の町々にも広がり、ボストンにある会衆派教会のコールマン牧師（Benjamin Colman）は、エドワーズに詳細な報告を求めた。

1734年12月17日、ドイツ・モラビア派のシュパンゲンベルクがジョージア入植評議委員会に助けを求めてロンドンに到着。同委員会は、すでにザルツブルクからの宗教非難民をジョージアへ送り、また1689年に設立された The Society of Promoting Christian Knowledge (SPCK) の活動支援にも積極的であったことを、シュパンゲンベルクは知っていた⁶。一ヶ月後の1735年1月23日には、シュパンゲンベルクは、ジョージア入植者第一陣を率いて渡航した。

1735年の春、オックスフォードでホイットフィールドが信仰義認の教えを受け止め福音体験をした。ウェールズでは、ホイットフィールドよりも1歳若い、当時21歳であった学校の教師ハウエル・ハリス（Howell Harris）が信仰に目覚め、断食、自己精査、罪との格闘、やがて霊的絶望を経て、5月25日に聖餐式の中で、罪赦され新しく生まれ変わったとの確信に立った⁷。6月には、ウェールズの国教会司祭であったローランド（Daniel Rowland）も同じように福音を体験した（この時点で二人は出会っていない）。

⁵ Jonathan Edwards, “Unpublshed Letter of May 30, 1735”, in Edwards, *Works*, 4:101.

⁶ こうしたヨーロッパの敬虔派の人々が、イギリスを経由して、より自由なアメリカの植民地へと移住した。その際、英国に留まった者たちも多くいる。当時の英国社会・教会はピューリタン革命の終焉・王政復古の過程にあり、積極的に敬虔主義の流れを取り入れ、いくつものソサエティーが生まれた。The Society of Promoting Christian Knowledge (SPCK, 1698)、あるいはウエスレーも招かれて説教している The Society of the Reformation of Manners (1691)、そして The Society for the Propagation of the Gospel(1701)など大きな組織や、個人的な聖書研究の集まり、また霊想書の出版などが特に盛んになったという。参照、Henry D. Rack, “Religious Societies and the Origins of Methodism,” *Journal of Ecclesiastical History* (Oct. 1987), 582-84.

⁷ ハリスとウェールズのカルヴァン派メソジストについては、参照、Martin Lloyd-Jones, “Howell Harris and Revival,”

<http://bsrich.tripod.com/calvinistic/rev.htm>

あるいは、Richard Bennett, *Howell Harris and the Dawn of Revival*, 2nd ed. (Brynirion Press, 1987).

同時期、エドワーズはリバイバルの報告を書き上げ、報告書はコールマンを通して英国会衆派の指導的牧師ガイス（John Guyse）のもとに届けられ、ガイスはアイザック・ワッツにそれを紹介している。ガイスは、エドワーズの説教の出版、また今回の報告よりもさらに詳細な報告を出版したいと、コールマンを通してエドワーズに打診した。

1735年の秋には、モラビア派の第二陣がロンドンに到着し、ジョージアに向けて準備している。ホイットフィールドは故郷グロスターで小さなソサエティーを二つ作り、ハリスはウェールズで戸別訪問をしながら伝道し、コネチカットのイエール大学では、後に長老派の指導的牧師・プリンストン大学の学長を務めることになるアーロン・バー（Aaron Burr）が福音体験をしている。

同年7月にジョン・ウェスレーはジョージア入植者とアメリカ原住民への伝道のためにアメリカに渡るように SPCK から勧められ、9月にオグレスープと会談して渡航を決意した。チャールズ、ホーリークラブのインガムとデラモットと共に、ウェスレーは10月にジョージアに向けて、ジョージア入植のモラビア派第二陣と共に出航した。

ジョージアでシュパンゲンベルクと出会ったウェスレーは、開口一番、「聖霊があなたは神の子どもであると、あなたの霊と共に証しをしていますか？……あなたはイエス・キリストを知っていますか？」と福音体験の是非を問われ、その後モラビア派から多くの影響を受けることは有名である。インガムへの影響はさらに大きく、1737年に帰英後、ウェスレーとではなくモラビア派と活動を共にする。

1736年、ウェールズのソサエティーはハウエル・ハリスの指導のもと30を数えるようになる。ホイットフィールドは、ジョージアのウェスレーから「収穫は大きいですが、働き手は少ない」との招きを受けて、アメリカに渡ることを決意する。しかし、手続きが遅れ、ロンドンで福音体験に基づいて説教をする。1737年の8月からジョージアに旅立つ12月30日まで、彼はなんと100回以上も説教をしている（週に6、7回）。

年改まり1737年、ウェールズのハリスは選びの教理を信じるようになり、またダニエル・ローランドと出会い、ウェールズのリバイバルが本格化する。ローランドの説教には1500～2000人の聴衆が集まったという。またバークシャー

ではセニック（John Cennick）が1737年9月に福音体験をし、ホイットフィールド、チャールズ・ウェスレー、ハリスらと出会い、やがて彼はモラビア派の伝道者としてアイルランドで活動するようになる。

英国でリバイバルが始動していく中、ボストンのコールマンの依頼を受けて、エドワーズはノーザンプトン・リバイバルの詳細な報告を書き上げ、コールマンはそれを18頁に要約し、エドワーズの説教二篇を付加して出版し、さらにそのコピーをロンドンのアイザック・ワッツのもとに送った。ワッツは、要約版ではなく完全原稿を求め、1737年10月に Faithful Narrative が出版され、ノーザンプトンのリバイバルから2年経過して英国でその詳細が明らかにされた⁸。

ハリスもローランドもエドワーズの Faithful Narrative を読んで、ニューハンプシャーのリバイバルと同じ現象がウェールズで起きていることを確信した。

1738年にジョージアに着いたホイットフィールドは、サヴァナの5百名のイギリス人と二千人の先住民に週に2回説教し、周辺地域に宣教し、学校を複数、そして孤児院を設立した。多くの挫折を体験したウェスレーと違って、ジョージアのホイットフィールドは情熱的な人気者であったその年の12月8日にロンドンに戻った彼は、ハリスと文通を始め、その友情と伝道の協力は生涯にわたった。

この年、かつてシュパンゲンベルクが神学教授をしていた頃の学生ペーター・ベラー（将来、ジョージアでシュパンゲンベルクの後継者となる）がロンドンにわたってきて、ウェスレー兄弟と密接な交わりを持った。モラビア派はイギリスに宣教に来たわけではない。しかし、ロンドンにウェスレー兄弟をはじめ靈的に渇いているキリスト者が多くいるのを見て、英語で運営されるソサエティーを結成。それが後のフェター・レイン・ソサエティーである。ジョン・ウェスレーはその初期からのメンバーであった。結成してすぐにベラーはアメリカに渡る。そして5月17日、チャールズはモラビア派の友人の手ほどきを得てルターのカラテヤ人への手紙の講解を学びつつ、「私を愛し、私のためにご自身をお捨てになった方を感じることができるように努力し、待ち望み、

⁸ タイトルは、*A Faithful Narrative of the Surprising Work of God in the Conversion of Many Hundred Souls in Northampton, and the Neighbouring Towns and Villages of New-Hampshire in New England.*

祈り」、21日は「私は神との和らぎを見いだした」と福音体験が明確になった⁹。5月24日の兄ジョンのアルダスゲイト街のソサエティーでの福音体験は、ここでは説明を割愛する。また、アルダスゲイトでの福音体験のあとウェスレーの信仰が1年間様々に揺れた事実も説明を省略する。どちらにしても、ドイツ・モラビア派の影響はウェスレー兄弟の福音体験にとっては絶大であった。その福音体験を土台に、二人の説教に、賛美歌に、そしてソサエティーの形成にと現れ、ウェスレーのメソジスト運動は展開されていく。

英国における信仰復興運動の胎動は、こうした複数の人間の同時発生的な福音体験にあるが、その連携を象徴する出来事を挙げておく。1739年1月1日から2日の未明にかけて、ウェスレー兄弟（アルミニアン系）、ホイットフィールド（カルヴァン系）、インガム（モラビア派へ）と、後にその神学的事情の故に別々に行動する者たちが、フェター・レイン・ソサエティーで共に祈り、証しし、賛美していた。ウェスレーはこの日の出来事を以下のようにしたためている。「午前三時頃、私たちが短い祈りを連続してささげていたとき、神の力が強く私たちの上に望んだ。喜びのあまり、多くの者が叫び、床にひれ伏す者もいた。主の臨在への恐れと驚きから少し回復した後、私たちは心を一つに互いに言った。『神よ、あなたを賛美します。あなたこそ主です』」¹⁰。1739年以降、爆発的に広がるリバイバルを前に、やがて神学的な理由で3つに分かれていく流れが一つとなって祈ったことは、意義深いことであった。

II. 偉大な大衆伝道者ホイットフィールド

A. アメリカでの活躍

1739年2月17日、ホイットフィールドは、熱狂主義者と批判され、バースやブリストルの教会の講壇から閉め出され、野外説教という大胆な第一歩を踏み出した。この大規模な野外説教によって、福音体験が堰を切ったようにリバイバリズムへの流れとして拡大していった。3月の終わりにホイットフィー

⁹ Charles Wesley, *A Reader*, edited by John R. Tyson (NY: Oxford Univ. Press, 1989), p.96-97.

¹⁰ ウェスレー、『日誌』（同日）

ルドの招きを受けてロンドンから到着したウェスレーはホイットフィールドの野外説教の光景を見て足がすくんだ。しかし、国教会司祭としてのプライドを捨て、勇気をもって踏み出した第一歩は彼の考えを全く変え、ウェスレーは、ホイットフィールドの野外説教とその産物であったソサエティーを引き継いだ。ロンドンに戻ったホイットフィールドは、そこでも野外説教を展開し、それを見たウェールズのハウエル・ハリスも大いに感化を受け、両者は協力関係を約束した¹¹。ブリストルでは、ウェスレーの監督の下、ジョン・セニックが初めて信徒説教者として野外に立った¹²。

1739年10月にアメリカに渡ったホイットフィールドは、フィラデルフィア、ニューヨークを訪れ、そこから南下して1740年1月にジョージアのサヴァナに到達し、説教と孤児院ベテスタ（アメリカで初めて作られた孤児院）の建て上げに尽力し、4月にはフィラデルフィア、ニューヨークに戻った。そのとき彼の説教を聞くために野外に集まった人々は1500人になっていた。アメリカにおける欧州入植地域において、集会のためにこれだけ大勢の人間が野外一カ所に集まったのは、これが初めてであろうと言われる¹³。9月には北上して、ロードアイランド、ボストン（ここでの会衆は2万人、町の人口以上を数える¹⁴）、南下してハートフォード、ニューヘイブン、ニューヨーク、フィラデルフィア、その間彼は少なくとも200回の説教をこなした。そして最後はさらに長旅をして11月にジョージアのサヴァナから帰国している。この1年、またその後の彼の生涯で6回も北米巡回伝道をこなし、最後はボストンで天に召されたホイットフィールドのアメリカにおける影響力は絶大であった。ニューイングランド

¹¹ ホイットフィールドとハリスの協働については、David Ceri Jones, “A Glorious Work in the World,” in *Welsh Methodism and the International Evangelical Revival, 1735-1750* (Cardiff: University of Wales Press, 2004), pp. 113-124.

¹² 8月にホイットフィールドがアメリカに出発して間もなく、ウェスレーはパンフレット「Free Grace」を出版。ホイットフィールドやセニックの説くカルヴァン主義の選びの教理と自らの立場との神学的な違いで混乱した会衆を収める目的でウェスレーは出版するが、これによって連携の中で生み出された信仰復興運動は、突如、二分されることはあまりにも有名である。

¹³ Noll, *The Rise of Evangelicalism*, 104.

¹⁴ Whitefield, *Journals*, 472.

の長老派教会、会衆派教会に信仰復興運動の息吹を与え、彼の影響下から多くのバプテストやメソジストの伝道者が誕生し、また少し小さめのクエーカーやドイツ敬虔主義の流れもリバイバルの勢いに引き入れることができた。それは、ホイットフィールドが入植地域によって宗派が違ふ様々な地域を自由に精力的に巡回した故であろう。帰国してすぐに彼はスコットランド巡回に入り、長老派の国教会にリバイバルの息を吹き込むことになる。スーザン・オブライエンが、このようにしてホイットフィールドの精力的に巡回伝道によって結びつけた霊的勢力を「Transatlantic communion of saints」と呼ぶ¹⁵。

B. 説教者ホイットフィールド

当時の人々が説教者ホイットフィールドを描写した記録は多く残っているが、中でもエドワーズ夫人のものは有名である¹⁶。

ホイットフィールド先生は、私たちアメリカの説教者に比べると教理よりも心に訴えることに力点がありました。彼は生まれながらの雄弁家です。声は低く、クリアで、それでいて歌うように流れる話し方。完全な音楽です。聖書の最もシンプルな真理を語ることによって、彼が聴衆を魅了していく様子を見ているだけで感動を覚えます。一千人の会衆が微動だにせず、彼の言葉に耳を傾けているのを見ました。ときおり、押し殺したようなすすり泣きが聞こえるだけです。

しかし、反面、マーク・ノルは、これだけの範囲を短期間に移動し、多くの教会や牧師たちと会い、何百回も説教をして疾風のごとく駆け抜けていくホイットフィールドの性格、またその働きのあり方にも少々の批判を加える。批判の材料となっているのは、ホイットフィールドが各地で出会う牧師たち、あるいは教会の批判が往々にして性急であったこと、また一方で黒人奴隷の劣悪な状況を批判しながら、他方でジョージア孤児院のためには黒人奴隷を買うという行動に出ること、などである。

ホイットフィールドが成し遂げてきたことは、どのような水準に当てはめ

¹⁵ Susan O'Brien, "'A Transatlantic Community of Saints': The Great Awakening and the First Evangelical Network, 1735-1750," *American Historical Review* 91 (1986), 811.

¹⁶ Tyerman, *Whitefield*, I: 419-20.

ても、賞賛に値する。キリスト中心の説教に対するこだわりは灯台の光となった。だが、彼の人柄も働きも誠実さにあふれているが、必ずしも幅広い働きに一貫性があるわけではなく、また深い洞察をもって文化に取り組むことはなかった。いつでもどこでも・情熱を持って・目的にまっしぐら、それが彼のスタイルである。一言で、アメリカのエヴァンジェリカルの歴史において後に現れる良い部分も悪い部分も、その多くが、この時点のホイットフィールドに現れていたと言えよう¹⁷。

C. パブリシティーとリバイバルズム

ホイットフィールドは、アメリカ巡回中いつも2〜3人の助け手を伴って移動し、そうした人物の助けによって、広報やネットワーク作りに専念していたのは興味深い。ホイットフィールドがアメリカから母国に向けて多くの手紙を送っていた。そこには当然、ウェスレー兄弟、ハリス、インガム、デラモット等、英国のメソジストネットワークと連携しているホイットフィールドの姿を見る。

しかし、彼の手紙の用い方は、個人的な域を超えている。たとえば、北米大陸を巡回していたとき、ホイットフィールドの秘書的存在であったシーワード (William Seward) は、次に移動する町で、前の町の集会でどのような神の御業がなされたのか、どのような回心の証しなどを掲載しながら、ホイットフィールド到着を前にして手紙が出回るように手配していた。手紙はロンドンにも送られた。ホイットフィールドの報告は、アメリカからロンドンのホイットフィールド礼拝場 (Whitefield Tabernacle) に送られ、そこでは手紙が到着すると、朗読集会 (Letter Days) がもたれた¹⁸。

手紙の内容は、日誌的に記され、伝道活動がどのような成果を上げているかが主であるが、そこに回心体験の状況が詳細に記されていることもしばしばある。そうしたパンフレットや手紙が、次の大集会を予定している町に、先回りして配布される。すると、証しが励みとなり、同じ体験、同じリバイバルを得られると期待をする。イギリスでは、伝道者や信徒リーダーが手紙を読み上げれば、その体験と照らし合わせて、自分の体験をより明確に捉えることになる。

¹⁷ Noll, *The Rise of Evangelicalism*, 108.

¹⁸ O'Brien, "Transatlantic Community of Saints," 825-862.

また、福音体験を強烈に体験した者たちが地方の少数ではなく、自分たちはいま、聖霊がこれまでとは違う次元で大きく働いておられる世界、それも大西洋を挟んだ大きな聖霊の働きの一部に取り入れられているということを実感したに違いない。これがリバイバリズムにあって「福音体験の証し」が果たしてきた大きな伝道的な役割である。

1741年にイギリスに戻ってきたホイットフィールドは、絶版寸前であった *The Christian Amusement* という雑誌に目をつけ、その編集に入り込み、*The Weekly History* と改名して、大西洋を挟んで展開されている各地の報告や証しを掲載した簡易雑誌を作った¹⁹。その後8年間継続して発行されることになるが、カルヴァン派メソジストの伝道者が巡回に出るとき、少なくとも500部を携行し、ホイットフィールド礼拝場からは、いつも英国各地へと発送されていた²⁰。同じように、スコットランドではカルヴァン派メソジストのサークルが *The Glasgow Weekly History* を刊行し、アメリカでは1743年に Thomas Prince²¹が編集する *The Christian History* が刊行された。3つの雑誌はその中身に重複する部分がかかなりあった。同じ手紙、説教、証しなどが掲載されたり、一つの雑誌に掲載された記事が、他の雑誌に再掲載されることもあった。しばらくして、予定論を巡ってカルヴァン派とウェスレー派が分裂していくと、これらの雑誌には、予定論や完全論を巡っての神学論争も掲載されることになる。

D. リバイバルネットワーク

イギリス、ウェールズ、スコットランド、そしてアメリカのそれぞれの入植

¹⁹ このパンフレットの中身は、PDFで閲覧可能。「Whitefield *The Weekly History*」で検索するか、http://web.mac.com/quintapress/PDF_Books/Weekly_History.pdf

²⁰ Lambert, “Pedlar in Divinity,” 70. ちなみに、1747年11月に、エクセターとプリマスに150部、グロスターに80部、ポーツマスに40部、エセックスとスタッフォードに各50部という記録が残っている。参照、Edwin Welch (ed.), *Two Calvinistic Methodist Chapels, 1743-1811: The London Tabernacle and Spa Fields Chapel* (London: London Record Society, 1975), 13.

²¹ Thomas Prince (1687-1758) はアメリカの牧師、歴史家で、*A Chronological History of New England, in the Form of Annals* をもって歴史家として本格的歴史家として評されている。

地域をつなぐ組織は、いまだ作られていなかった。1743年1月に、ホイットフィールドはウェールズのリバイバルの中心にいるハリスと連携し、英国国教会の中に the Joint Association of English and Welsh Calvinistic Methodism を結成した。ホイットフィールドを議長として、彼を含めてハリスやローランドなど5名の牧師、信徒伝道者セニックを正式メンバーとし、その他7名の信徒伝道者が陪席した。これはウェスレーの年会（1744年6月）よりも18ヶ月早く結成された最初のメソジスト組織と言われる。

しかし、1744年から1748年に4年間、ホイットフィールドがアメリカに行っている間にこうした連合体は弱体化していく。また、ハウエル・ハリスは1750年に、モラビア派のパトリパシオニズム（十字架で御子だけでなく御父も受苦したとの教え）に感化されているとローランドから非難され、この組織から距離を置くことになる²²。しばらくは故郷トレヴェッカ (Trevecca) に退き、そこで伝道した。

1762年のウェールズ最大のリバイバルをもってハリスとローランドの関係は修復され、ハリスは63年には Welsh Calvinistic Society²³に戻った。1769年にはハンティントン伯爵夫人²⁴の協力を得て、ハリスは Trevecca College を創設。開校礼拝の説教者はホイットフィールド、またジョン・ウェスレーも説教に訪れるようになる。翌年ホイットフィールドはアメリカに戻りボストンにて死去。1770年代に入るとハンティントン夫人は私財を費やして多くの礼拝堂を建設

²² Geraint Tudur, *Howell Harris From Conversion to Separation 1735 – 1750* (Cardiff: University Press of Wales, 2000), chap 7-8.

²³ Welsh Calvinistic Society は英国国教会の中に止まるが、その後司祭の按手をもった伝道者が減少し、聖餐式を執行することができず、1811年に按手礼を施すことで、正式に国教会とは独立し、ウェールズの長老派教会を形成した。

²⁴ ハンティントン伯爵夫人(1707-1971)は、姪がホイットフィールドの説教を聞いて回心した証しを聞いて自らも回心体験をする。Boyd Stanley Schlenther, *Queen of the Methodists: The Countess of Huntingdon and the English Century Crisis of Faith and Society* (Bishop Auckland: Durham Academic Press, 1997), ch.5. 簡単な資料として、Countess Huntingdon Connexion の公式サイトに Gilbert W. Kirby による小伝 *The Elect Lady* が (published by the Trustees of the Countess of Huntingdon's Connexion, 1972) 掲載されている。

し、ウェルシュの説教者を連携させ、かつてのホイットフィールド的なネットワークを盛んに育てていった²⁵。

リバイバルネットワークの関係で、もう一つ言及に値するとしたら、ホイットフィールドがアメリカのジョージアに建てた孤児院ベテスダである。1738年の初めてこの地を訪れたときに、彼は行き場を失った貧しい子どもたちのために建設したが、ホイットフィールドはこれを福音の働きの一環として捉え、1740年二度目に訪れたときには資金不足を解消するために秘書役のシーワードをイギリスに送り戻し、また *The Weekly History* が創刊されてからは、何度もベテスダでの様々な出来事を掲載し、募金を訴えている。彼の考えでは、孤児院ベテスダの運営は、リバイバルの働きが海を越え、地域を越えて担うべき宣教の一環であると捉え、教派を越えて動いていた²⁶。建設のためにはベンジャミン・フランクリンの金銭的協力があり、またイギリス国王ジョージ II 世に手紙を書いて資金を得たのはウェスレー兄弟であった。これをもって、18世紀の終わりがごろから始まる現代宣教運動の始まりとするのは言い過ぎであろうが、リバイバルの初めから、このようにして海を越えて地の果てへと福音を伝えること、しかもそのとき博愛的な働きが中核に含まれていたことは事実である。

Ⅲ. なぜこれほどまでの広がり？

大西洋を挟んだ英語圏で、しかし別々の地域で、ほぼ同時期にリバイバルが広がっていったのはなぜだろうか。18世紀のリバイバルの当事者たちは、口を揃えて単純な答えを導き出す。すなわち、「聖霊による信仰復興運動である」と。エドワーズは、歴史の中に働かれる神を思い巡らし、「墮落から今日に至る人間の歴史の中で、贖いの御業が効力を発揮するのは、圧倒的に、神の御霊が著しく注がれる時である」²⁷と結論している。英国で、リバイバルの最初の歴史家

²⁵ Alan Harding, *The Countess of Huntingdon's Connexion: A Sect in Action* (Oxford: Oxford University Press, 2003), 348-349.

²⁶ Neil J. O'Connell, "George Whitefield and Bethesda Orphan-House," *Georgia Historical Quarterly* 54 (1970), 53-54.

²⁷ Edwards, *History of the Work of Redemption* (preached 1739), in Edwards, *Works*, vol.9, *A History of the Work of Redemption*, ed. John F. Wilson (1989), 143.

として知られるジョセフ・ミルナー (Milner, 1749-1797) は、「聖霊のはげしい浸出 (effusion)」の結果として説明している²⁸。ウェスレーもまた、メソジストの起源を歴史的に解説しながら、それが聖書の教え、特に信仰義認の教理が説教されたことに対する自然の応答したとき、聖霊が働いて運動が生じたことを説明している²⁹。

もちろん、そこには核となる人物がいた。世紀の説教者と呼ばれるホイットフィールド、組織作りとその運営の天才と評されるウェスレー、一般人に印刷物を大量に頒布する働きの開拓者となったシーワード、新生と霊的成長のためにすぐれた賛美歌を創作して用いたチャールズ、神学的著作を多く残し、新大陸での神学的流れを決定づけたエドワーズ、等々、同時発生したリバイバルには、「運動」を担うべく若くして精力的な人物が備えられていた。あるいはそこには、広がりを生じさせる背景 (教会的、神学的、社会的)、またそれを展開させる手法にも摂理は働いていたわけで、それがいったい何であるかを歴史家は解明しようと努力してきた。いくつか指摘しておきたい。

A. 「福音体験」とリバイバリズム

ホイットフィールドやウェスレー兄弟の劇的な福音体験は確かに後のリバイバリズムへの跳躍台の役割を果たしていた。1734 年から 35 年にかけての冬、ホイットフィールドは自らの罪深さに打たれ、レントの期間には医者 の指示によって 7 週間床につくことになる。その苦悩のクライマックスとして、

神は、その御心のままに、重荷を私の心から取り除き、私が生きた信仰をもって御子を捉えることを可能にさせ、神の子どもとされたことを確認する御霊を与えて、永遠の贖いの日に至るまで私の救いを確かなものとされた。……信仰の全き確認が私の絶望的なたましいを勢いよく突き破った。

²⁸ Joseph Milner, *The History of the Church of Christ*, vol.1, 2nd ed. (Cambridge: Cambridge University Press, 1800), ix-x, 4. ミルナーによる 18 世紀信仰復興運動の解釈については、John Walsh, “Joseph Milner’s Evangelical Church History,” *Journal of Ecclesiastical History* 10 (1959), 174-87 に詳しい。

²⁹ John Wesley, “A Short History of Methodism” (1764), *Works*, viii, 349.

私はこの日を確認に捉えた。私はこの日を永遠に忘れない³⁰。

福音体験への道のりは、1738年のウェスレーのアルダスゲイト体験と酷似している。また両者ともそれを日記に克明に記し、それを出版し、後の福音体験をする者に語り継がれていったことも同じである。

野外であろうが屋内であろうが、リバイバリストたちは、大衆の知的趣向には捕らわれず、個人の霊的覚醒・回心を中心に説教した。認罪、悔い改め、そして十字架を個人的に信じ、救いを得たとの確信を得ること。やがてそれが連鎖的に広がり、新しい信仰共同体を形成していく。しかしその中であって、常に個人の回心と信仰的な生き方が強調される。リバイバリストたちは、ホイットフィールド、ハリス、またウェスレー兄弟のように教会を担任しない者、あるいはエドワーズやローランドのように教会を担任する者の別はあるが、いずれにしても広い範囲を巡回して悔い改め訴え、十字架信仰と個人的な救いの渴望を呼び覚ましている。その説教は心に向かう福音的情感と気迫に満ちていた。

また、このように説教を聞くことによって回心するという体験が、文書の形で広くイギリスとアメリカに頒布されていくとき、新しいメディアに載って期待と刺激が伝わっていったことになる。その意味で 1737 年、エドワーズの *Faithful Narrative* がロンドンで発刊され、イギリスのリバイバルを率いる者たちに多大な感化を受けたことは歴史的な出来事であったと言っても過言ではない。エドワーズ自身は *Faithful Narrative* の中で以下のように記している。「他人の回心のニュースを、神が私たちの間になされるご自身の働き的手段として用いられるとは、私が知っている限り例のないことである」³¹。人の罪深さと認罪に打たれた魂の動きを克明に描き、十字架による神の救いを力強く説明し、信仰によって義とされた心に聖霊が与える変化を描写しているこの本は、イギリスで福音体験をした牧師たちに、「彼らもまたリバイバルをイギリスで体験できるという希望を与えた」³²。福音主義神学とそれに基づく福音体験の理解が、イ

³⁰ Murry, *George Whitefield's Journal*, p.58.

³¹ Edwards, *Faithful Narrative of Surprising Conversion* (1737), in Edwards, Works, vol. 4, *The Great Awakening*, ed. C.C. Goen (1972), 176.

³² D. Bruce Hindmarsh, "The Reception of Jonathan Edwards by Early Evangelicals in England," in David W. Kling and Douglas A. Sweeney (eds.), *Jonathan Edwards at Home and Abroad: Historical Memories, Cultural Movements, Global Horizons*

ギリス、ウェールズ、スコットランド、アメリカで共有できたのは、まさにこのような回心物語やリバイバルの歴史的既述の出版による³³。

さて、リバイバリズムの明確な回心と新生体験の説教・訴えを受け取り、またそれを広める土壌として、近年、啓蒙主義思想の浸透が取り上げられていることは興味深い。これまで、生き生きとした福音体験は、啓蒙主義・合理主義に対する反動として理解されてきた。たとえば、1966年のジョン・ウォルシュの論文は、リバイバリズムが福音体験を強調するとき、それは無神論的な啓蒙主義精神への反発であり、合理主義に染まる当時の教会神学への反動であったと解釈している³⁴。これに対して、1989年スコットランドの英国教会史家ベピントンは、その逆の解釈を提示した。ベピントンは、ジョン・ロックに見る。個人の経験こそが真の知識の源泉となるとのロックの認識論は、18世紀英米の信仰復興運動の中に取り入れられ、神についての真の知識は個人的な神経験、神との出会いを源泉とするとの理解に至ったと言う。キリスト教の「知」は、信仰信条を学んで受け入れる「頭の知」ではなく、リバイバリズムの世界では、罪の苦悩を越えて、キリストの十字架を個人的に信頼し、たましいの中心で罪の赦しを受け取る経験に基づいた「心の知」であった。これがリバイバリズムに共通する救いの確証の教理となる³⁵。言うまでもなく啓蒙主義の思想家たちが福音主義者であったというのではない。しかし、啓蒙主義は福音主義者とその主張が積極的に受け入れられ、浸透していく文化的土壌を作り出していた、というのである。

ベピントン批判も多くあることは事実である³⁶。たとえば、心の宗教の強調は、ロックの思想とは関係なくフランスのカトリック司教フェネロンなど広く

(Columbia: University of South Carolina Press, 2003), 202.

³³ ちなみに Edwards の *The Distinguishing Marks of a Work of the Spirit of God* は、ロンドンで 1741 年に発行されている。

³⁴ John D Walsh, "Origins of Evangelical Revival," in G.V. Bennett and J.D. Walsh (eds), *Essays in Modern Church History: In Memory of Norman Sykes* (London: A.C. Black, 1966) , pp.132-162.

³⁵ Jonathan Edwards,

³⁶ Garry J. Williams, "Enlightenment Epistemology and Eighteenth-Century Evangelical Doctrines of Assurance," in Michael A.,G Haykin and Kenneth J. Stewart, *The Advent of Evangelicalism* (Nashville: Abingdon, 2008), pp.345-374.

欧州カトリックを源泉として英国に広がっていたわけであるし、ましてやウェスレーのアルダスゲイト体験を導き出したのはモラビア派の敬虔主義であって、啓蒙思想ではない。宗教的「知」の世界で個人の経験を重視するジョン・ロックの影響は、ウェスレーにもエドワーズにも明確である。悔い改め（認罪・自己絶望）、十字架への信頼、新生の喜び、救いの確証という体験を聖霊は現実に与えてくださる、それをもってして真のキリスト者となるという「経験」の強調は、ロックの認識論、それをもとにした世界観と合致していたという理解は、ベントン以降多くの福音主義の歴史家が、程度の差はあれ認めるところであろう。

B. 流動する人と社会

新しい伝道の力は、産業革命後の急激な都市化現象、都市周辺への人口集中に英国国教会の教区制度は対応しきれず、既存制度からこぼれていった人々へ浸透していった。ハリス、ホイットフィールド、ウェスレー、だれをとっても、彼らの意図していたことは「新しい教団を創設することではなく、ボランティアな霊的共同体を形成することで既存教会のパン種となり、教会を活性化させることを目的としていた」³⁷ことは事実である。だが、彼らが実際に伝道のターゲットとしていたのは、おおよそ既存教会内には収まらない、はるかに広範囲な人々であった。

アメリカの植民地群は、教会構造的に、英国の事情とは異なっていた。「教会の権威構造はまだ出来上がっておらず、大きな教派のほとんどにおいて教職の地位は低く、宗教的な事柄に関して信徒が幅広く制し、教職と会衆との関係は衝突することがしばしばであり、反教職主義という雰囲気も広がり、教育を受けた牧師の数は少なく、新しい入植地域では牧師不在という状況が往々にしてあった」³⁸。こうした植民地群でリバイバルが始まると、それは一方で、教団教派がいまだ教会を建てることができないフロンティアで広がり、他方で、教

³⁷ John Walsh, "Origins of the Evangelical Revival," 161.

³⁸ Jack P. Greene, *Pursuits of Happiness: The Social Development of Early Modern British Colonies and the Formation of American Culture* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1988), 202.

会に属しながらも、靈的に満足していない人々の間に急激な広まりを見せた、ということになる。既存の教区教会ではカバーできない範囲へと伝道していくときに、信徒の巡回伝道者、あるいはソサエティーにおける信徒のリーダーは不可欠であった。それによって、教会や伝道の表舞台に信徒層が台頭してくることは、18世紀信仰復興運動の特色である³⁹。

さらに注目すべきは、18世紀の大西洋を挟んだ英語圏では、これまでにない人の動きがあったということである。産業革命によって都市化が進み、それによって市民社会が主導権を握りはじめ、人口は爆発的に増加し、アメリカや西インド諸島等、植民地への移動、往来も盛んになる。人とともに価値観は流動し、これまでの社会経済の枠組みは廃れていく。そうした社会の枠組みの中にあるキリスト教会にあって、こうした人の動きに合わせて新しい伝道形態を提示できたのが18世紀福音主義の流れであった。

ホイットフィールドを例にとって考えてみれば、上記のことは明白である。彼が類い希な説教者であったことは事実であるが、ウェールズ、スコットランド、アイルランドと巡回し、大西洋を何度も行き来し、いくつもの入植地を回る彼は、その地の異なった文化圏や条件に適応できる、独特な柔軟性を備えていたのであろう。「巡回伝道者たちは、次々に場所を移動して伝道するが、それはまさに人が移動し、世界が拡大していく中で神の自由な御霊が既製の枠に捕らわれずに働き出していくことの象徴であった」⁴⁰。その巡回伝道者たちの中で群を抜いていたのがホイットフィールドである。

³⁹ Deryck W. Lovegrove, ed., *The Rise of Laity in Evangelical Protestantism* (London: Routledge, 2002)は、特に信仰復興運動における信徒観・信徒の動きを考察している。その中でも、Mark, A. Noll, “National Churches, Gathered Churches and the Varieties of Lay Evangelicalism, 1735-1859”は優れている。また、アメリカに特化するならば、Nathan O. Hatch, *The Democratization of American Christianity* (New Haven: Yale University Press, 1989)は、信仰復興運動に由来するアメリカのキリスト教の特色を理解する上で必読書と言えよう。

⁴⁰ Timothy D. Hall, *Contested Boundaries: Itinerancy and the Reshaping of the Colonial American Religious World* (Durham, N.C.: Duke University Press, 1994), 131.

C. 宣教の情熱

また評価すべきは、彼のマーケティング・テクニックとも言える伝道手法であろう。ランバートは、彼を「福音の行商人」(pedlar in divinity)⁴¹と呼ぶ。消費文化が飛躍的に伸びていく英語圏にあって、ホイットフィールドは、いわばロンドンの市場で、他の日常の商品と同じく、説教をし、安価な福音の雑誌やパンフレットを出版し、福音の真髄を売り込む気概と勢力と魅力にあふれていた。

信仰覚醒運動は、伝統的な教会制度に縛られることはなく、制度の外で展開され、カリスマ的指導者を中心に広範囲にネットワークを育てていく。福音体験を導く説教が定期的になされると、その場所にソサエティーが信徒をリーダーとして形成され、やがてその集まりを説教者が巡回し、それらを連携するネットワークができあがる。そのネットワークの中で、回心の出来事が証しされ、出版され、共有され、福音体験や神学が増幅されていった。またそうした中で、Trevecca College のように次のリバイバル世代を担う神学校が建設されたことも、ベテスタ孤児院のように慈善の心が海を渡って相互に影響し合うことも、意義深い。

(インマヌエル高津教会 牧師)

⁴¹ Frank Lambert, *Pedlar in Divinity: George Whitefield and the Transatlantic Revivals, 1737-1770* (Princeton: Princeton University Press, 1994) .